慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福田徳三著 社会政策と階級闘争
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.3 (1922. 3) ,p.426(136)- 431(141)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220301-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

福田德三著「社會政策と階級闘爭」

四六版五一四頁
定價四圓五十錢
大倉書店發行

社會組織の變化に際して何等かの形式の革命を必要とするか。或ひは勢の赴くに從つて社會組織は漸次に發展するものであるか。而してそれ等の變化は――革命に依ると發展に依ると問はず、――人爲を必要とするか、若しくは自然必然的に惹起するものであるのか。近時社會問題の喧しく論爭さるゝに當つて、此の種の疑問を抱懷するのは蓋し止むを得ぬことであらう。是等の問題を持して福田博士の近業「社會政策と階級闘爭」を讀む時、恐らく啓發さるゝところ少くないだらう。

本書は二篇に分たれ、一を「社會政策序論」となし、他を「階級闘爭と其當事者」と呼ぶ。是等兩者は「こゝにある狀態では、聯絡が十分に明らかになつて居ない。」然し前後相俟つて博士の對社會觀を一層明かに看取することが出來る。

マルクスの議論に從へば、現在の資本主義的社會形態は必然的に次ぎに來たるべき社會主義的社會形態に讓るべき筈である。而して資本主義組織の完成はこゝに社會主義的社會制度の發生を齎らすものである。從つて斯くの如き發展が少數革命家の手に依つてなさるゝものでないことは明かである。福田博士はマルキシズムの必然論を樂觀說として排斥し、「資本主義を以て其自らに崩壞す可き必然的運命を有して居るものとは認めない。」（序文六頁）　そこで博士はマルクスの擴張再生產論より資本主義崩壞必然理論を考察し、其の資本主義生產行き詰りの理論に就いて左の如き批評を下されて居る。

「マルクスは其（生產と消費との）不一致を主張した點では大なる悲觀論者である、乍去、此不一致此矛盾は、資本制生產に內在的なものであると做し、其矛盾の爲めに、資本主義は必然的に崩壞するものと信じたのは、大なる樂觀に耽けつたものと云はねばならぬ。我々の僅かに有する現在經濟組織の客觀的研究より來る流通理論は、此意味に於いて、最極の悲觀を敎ゆるのみである。資本主義は決して內在的矛盾を有して居らぬ、其の無限擴張はアリストテレースが二千年の昔に於て明示して置いた通り、其れ自らには之れを遮る可き一の限界をも有して居らぬ。從つて、此の內在的矛盾の爲めに、資本主義が早晩崩壞す可き必然性は些も存しては居らぬ。否、彌々肥へ太り、益々擴張發展し行く必然性を有して居るのみである。約して云へば、過剩生產は、或場合を除くの外、今日の資本制生產の見地から見ては、必然的に起るものではないと同時に、厚生經濟の立場からは、彌々益々增加するものである。」（五〇九―五一〇頁）

此の點に關して河上肇博士は其の「社會問題研究」第三十冊に於いて、福田博士の文を攻擊して、

「しかし此の種の議論は、吾々が一たび生產財の性質を明かにすれば、實にひとたまりも無く覆つて仕舞ふものである。……一切の生產財は、一に生產手段と稱せらるゝによつても明かなるが如く、それは窮極、他の享樂財を生產する爲めの手段たるものである。……即ち一切の生產財は皆な消費の爲めの需要に向つて朝奏してゐるのである。

「其處には嚴然として『消費（消費のための需要）より來る制限』が在る。さうして正に此の制限のために、資本主義的精神の特徵たる『資本は無限の增殖』が屢々有力に阻止せられて、是れ亦資本主義的精神の特徵たる『產業恐慌』を惹き起す。

「勿論產業の進歩に從ひ、固定資本は次第に重きを爲すに至るが故に、一定の時、一定の社會に存在する生產財は、享樂財に對して、次第に其の割合を增大する。……斯樣にして資本主義は現在に於ける矛盾を、幾分宛將來に延期することが出來る。さうして其の然る限りに於て、資本主義を辯護する學者もその理論の矛盾を彌縫して行くことが出來る。」（同上通卷一〇七七―八〇）

然し此處で問題とするのは其の結論として必然的に資本主義的社會制度が崩壞するか如何かと云ふことである。勿論是だけの理由のみを以つて資本主義制度が必然的に崩壞するとは考へられない。此の點に關して余は小泉敎授が其の論文「資本主義の成熟と社會主義」（時事新報一月）に於いて「目前の事實は則ち斯の如きもので、而して此事に由つて資本主義は生產過剩を

必ずしもその必至の運命でないことを説明して居るのである。吾々は資本主義の恐慌に由る自動的倒壞を豫期することは出來ないのである。」と云ふに同じて又今日の生産消費の關係より見て、福田博士の所説に贊する者である。小泉教授は更に資本主義制度の倒壞に關し、其のプロレタリヤ對ブルジョワジイの階級闘爭に就いて論及されて居る。蓋し社會組織の變遷を必然的のものと見ずして論ぜんとすれば、勢ひ更に階級闘爭の有無、意義等に及ぶべき筈である。

「マルクスの説に從へば資本主義が發達の頂上に達して社會主義社會存在の物的條件が既にその胎内に孵化するときは、即ち勞働者がその境遇を堪へ難しとして舊制度の破壞を敢行する時である。併し其後の事實の觀察は此の二つの事が必ずしも同時に起らぬことを教へて居る。勞働者の狀態が堪へ難きものとなる國は、必ずしも資本主義が發達の高度に達して居る國では無い。同時に資本主義的先進國は。概ね勞働者の境遇の比較的最優良な國である。」

「次の社會の存立の物的條件が舊社會の胎内に孵化するときと民衆に取て其の境遇が堪え難きものとなる時とが一致する場合には舊社會は革命に依つて新社會に變形する。反之次の社會の存立條件が既に具はつても、民衆に取つて其狀態が堪え難きものとならぬ場合には、推移は平和に漸次的に行はれる。然るに次の社會の存立條件は未だ舊社會の胎内に孵化して居らぬにも拘らず、民衆の境遇が既に堪え難きものとなる場合には秩序の破壞丈が行はれて、新社會の建設がない。」（此の二項、前掲小泉教授論文）

「無産者獨裁」の如き革命的改新の行はれる場合は階級闘爭の最も激烈なる場合である。然しこゝに民衆の境遇が堪え難きものとなる場合とは如何なる狀態を指して云ふのであらうか。又社會の推移が平和に漸次的に行はれる時に於いても、尚ほ階級闘爭が何等かの形式で行はれるのは何故であらうか。「階級闘爭を是認する人は勿論の事、之を否認する人と雖も、階級の存在其ものを否定することは出來ない、階級の存在が軈て階級闘爭の事實を産み出すことも、亦否定することは出來ない。」（本書二六七頁）而して「階級の對抗が重要の事實となつたのは、一方は事業の主體たる雇主、他方は單に雇傭せられて働く勞働者であつて、其得る所得が一方は、自

決的であり、他方は他決的であると云ふことから起つたのである。」（同二七三頁）然らば民衆の境遇が堪え難き場合にのみ階級闘爭が惹起するものでなく、又斯くの如き場合に惹起するものは時に單なる騒動に過ぎないこともある。賃銀勞働階級が其の被搾取被抑壓の境遇を脱せんとする階級闘爭は必ずしも其の境遇が極度に堪え難き場合にのみ起るのではない。又それだけでは其の重要の度は甚だ鮮少である。

「階級と階級との闘爭、勞働階級と資本階級との抗爭は如何に激甚であつても、其れ丈けで直ちに社會其ものゝ問題たり得るものではない。然るに此の階級闘爭は事實に於て社會が自ら向上發展する上に於ける生みの苦しみであり、成長の惱みである。國家の爲めに併呑し盡されて居て時代を永く永く經過した後、漸くに『發見』せられた社會は、其發見と同時に――否、其發見其事が――直ちに否、其れに先つて、永く此産みの苦しみの内にあつた。」（二七―二八頁）

「殊に勞働爭議を單に一のプライス・カムプ（價格闘爭）と見るの失當が著しく顯はるゝのである。從つて勞働爭議を價格現象と見ることの甚だ不可にして、之を厚生現象と見ざる可からざる理由が存するのである。勞働爭議は『プライス・カムプ』でなく、『メンシエン・〝ムプ』（人の闘爭）であり、否パルゾエーンリヒカイツ・カムプ』（人格闘爭）而して然るが故に厚生闘爭たる所以茲に存するのである。」（一九二―三頁）

博士が價格經濟學に對して厚生經濟學を力説せらるゝ所以も亦此の『社會』の發見に基くものではないだらうか。即ち階級闘爭は單なる生活維持として賃銀所得の問題に終るものではない。然らば博士の云ふ『社會』とは何であらうか。又其の社會と國家とは如何なる關係に立つものであらうか。

「社會の存在を見出さない前と雖も、社會は儼として存在して居た。從つて、其存在を認めることなくしては、解釋し得られざる現象が樣々あつたが、……人は多く此等の現象が目するに異例、除外例を以てして居た。」（一一二頁）

「相反對せる二つの國家哲學が生れた。一は……階級國家觀闘爭國家觀である。他の一は……國家全能哲學である。……（中略）……而して此二つの異つた見解は、更に開展して、國家將來觀に就て、又た全く異つた解釋を生ずることゝなるのである。一は人類文明の一切の現象を擧げて、之れを國家に歸著せしむ可きもの、否、當然歸著するものと

し、他は人類文明の發達に從ひ、國家は其の爲す可き仕事を終つて其當然の運命に服し終る可きもの、又は當然服し終るに相違ないものと見るのである。玆に『社會の發見』が重大な關係を持つことゝなる。『社會』の存在を十分意識しない時代にあつては、國家に歸屬しない事項は之を『個人』に歸屬せしめる外はない。然し『個人』に歸屬せしめ得ないことも必ずある。然る場合、……國家に一括する能はず、個人に分割し能はざる此等の異例的現象は之をあげて『社會的』現象なりとするに至る。」（一五―一七頁）

然らば國家とか社會とか云ふ共同生活の意義は如何であらうか。

「個人の生活は此の共同生活なくしては永久に釋けざる矛盾である。……個人の生活の矛盾を釋き之を充實し、之を醇化するところの共同生活は、其れ自ら一の人格生活でなければならぬのである。」（六六頁）

「人格とは、此の自決的の、獨立の意思あり、さうして其の意思の發現である獨立自在、獨立自決の行爲をなす主體を云ふのである。然らざるものは、人格として缺陷のあるものであり、又は非人格である。」（六九頁）

「人類の存在の本義は、此の個人々々の生活と、國家、社會の生活とが合致することにある。」（七四頁）

「物格に對する權利の總體、即ち國家によつて各人に保障せられた支配物の全體は財産で、之は國家の直接なる擁護、保障の下に立つ。人格に對する權利の總體、即ち國家によつて間接に財産所有者に保障せられる支配人格の全體は即ち狹義に云ふ『勞働』である。」（一三五頁）

「生活は運動を意味する、人格生活の運動は、人格性と非人格性との戰鬪である。」（一四〇頁）

「社會とは、一切の人格鬪爭、生活鬪爭の總名稱であり、國民經濟とは其の最要部を占むる經濟生活鬪爭の總名稱である。」（一四一頁）

以上の拔萃に依つて大體博士の云はんとするところを知り得ると思ふ。一方勞働絞取の現象を是認し、社會に於ける鬪爭を肯定する博士は、他方國家否定を拒む者である。然らば更に如何なる點よりして博士は社會政策なるものを樹立さるゝのであらうか。即ち、

「今日迄の現實に就て定義を下せば、國家とは支配關係に滿足する限りの人格對非人格の調和――之を假りに强制調和と名づけて置く――の實現せられて居る共同生活であり、社會とは之に滿足せざる鬪爭對抗の共同生活なりと云はねばならぬ。社會政策は之に滿足せざる鬪爭、對抗の共同生活を出來る丈け廣汎に國家容器に包擁せしめようとする政策の謂であると云つて差支ない。」（一六三―四頁）

斯くの如く國家を解するとは單に前掲の二種の議論、――鬪爭國家觀と國家至上主義の中間をゆくものとのみ見得るであらうか。寧ろ共同生活を出來る丈け廣汎に國家容器に包擁せしめようとする政策を是認せらるゝ點より見れば、寧ろ後者に近いものと云へないだらうか。故に博士は極力ギルド社會主義を排斥して、無政府主義の極めて微溫的なるもの、若しくは假面を被れる穩和的無政府主義であると呼ばれて居る。（三六四頁其の他）然し本書に現れたところを以つてしては、未だ吾人に十分の滿足を與ふるものであるとは云へない。博士は「國家の外圍をして彈力性に富むものたらしめ、出來る丈け十分に共同生活の鬪爭を廣汎に其の內に包擁するを得せしむること」が社會政策第一の本領であるとして居るが、斯くの如くして形成された國家の形式は果して如何なるものであらうか。此の點に就いて博士の所論は未だ吾人に明白な觀念を與へて居るものとは云へないだらう。勿論本書に示されたところは博士自ら云はるゝ言葉に依れば、「ホンの見本に過ぎないものである。」（序三頁）從つてそれ等の點に就いては今後に於ける博士の勞作を俟たねばならぬ。尙ほ吾人は「社會主義が誤りて敎へつゝある所を正しく敎ゆるもの」としての社會政策の具體的方法に就いて、――それが博士が「極力排斥」する所謂協調の政策と嚴然區別するが爲めに、鬪爭の壓迫にもあらず、又一時的調和にもあらざる方法手段を指示さるゝことを希望する者である。讀過匆々にして筆を採り、博士の眞意を誤り傳へることなくば幸である。

（野村兼太郎）

寺井久信著　**船荷證券**

寶文館發行
本文二六八頁
附錄一四六頁
定價四圓五拾錢

本書は緒論に於て船荷證券の沿革、發行及び